

と考えている。

雑草が窒素肥料に反応することをこれまで述べてきた。雑草にとって適量の窒素濃度であれば、生育促進につながることになるが、過剰の場合は窒素（あるいはアンモニア）の濃度障害によって生育を阻害することになる。そこで果樹の根にとっては適量であるが雑草の発芽に対しては過剰となるよう

な窒素濃度を局所施肥によって作り出せれば、雑草生育を抑制しつつ果樹へ肥料成分の供給を効率的に行うことができると考えられる。一方、局所施肥での非施肥部分については雑草の生育がかなり抑制されるので、草刈回数の削減など作業の省力製が期待できる。この検討はまだ不十分ではあるが、雑草の施肥反応を理解し、肥料をうまく使うことで効率的かつ省力的な栽培管

理ができる可能性がある。

参考文献

- 井上博道ら 2012. 有機物長期連用ブドウ園地の土壤中炭素濃度と全窒素濃度の経年変化. 土肥誌 83, 687-690.
- 井上博道・草場新之助 2013. ニホンナシの樹体栄養や雑草生育に対する被覆尿素的局所施肥の影響. 土肥 要旨集 59, 121.



荒地地瓜（アレチウリ）

（公財）日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

ウリ科アレチウリ属の大型の蔓性一年生草本。生育速度が速く、蔓は数mから十数mにもなる。肥沃なところを好むが、日当たりがよく冠湛水しないところであればどこにでも生える。

北アメリカ原産の帰化植物である。日本で確認されたのは1952年であり、まだ還暦を過ぎたところであるが、瞬く間に日本全国で確認されるようになった。

日本で確認されて20年になろうとする頃、少し先輩のセイタカアワダチソウやメリケンカルカヤ、ほぼ同期のオオブタクサなどがそのテリトリーを広げつつあるとき、アレチウリも例外ではなかった。輸入大豆から豆腐を作る豆腐加工工場の裏のクズ大豆捨て場や、蕎麦の実から蕎麦粉を挽く製粉工場の蕎麦殻捨て場、それらの廃棄物を集積し焼却するごみ焼却場の周辺などから、キュウリに似た蔓と葉を持つアレチウリは誰に邪魔されるこ

ともなく、その成長を謳歌していた。果実1個に種子は1個しか入らない。それでも、株が大きくなると1株で20,000個もの種子をつけるという。折しも世の中は高度経済成長の最盛期、アレチウリもその波に乗ってテリトリーを日本中へと広げていった。

万葉集に『瓜』を詠った歌が1首だけある。山上憶良の長歌である。

瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めばまして偲（しの）はゆ
いづくより来りしものそ まなかひにもとなかかりて
安眠（やすい）し寝（な）さぬ（巻5）

山上憶良が食んだ瓜はマクワウリのようなものだったといわれているが、こちらも帰化種。当時と今と、時の流れる速さはあまりにも違っているように思われるのだが・・・。